
crush my dream

リキュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

crush my dream

【Nコード】

N7979J

【作者名】

リキユール

【あらすじ】

警察の軽率なミスで組織の重要人物、ジンが逃走。新一に危険が迫る。バッドエンドになってます

1話 逃走

あの時からこうなると決まっていたのかもしれない

絶対に避けたかった

でも目の前で崩れ去った

「あゝねみいー」

「ちよつと新一、まだ2時間目よ？」

高校生に戻つて3ヶ月が経過した
副作用もなく不自由なく暮らしていた
ただ組織との対決で1ヶ月もの間入院を余儀なくされた
そのためまだ体育には参加できない
高校3年にとって体育は唯一時間を忘れられる教科なのだが
新一には今は苦でしかなかった

「さあ、歩けよ！」

刑事二人はある男を護送していた
長身長髪の大男、凍てつくような瞳
この男こそ、組織事件でも新一たちを苦しめたコードネーム・ジン

ジンは刑事に促されて歩いているが常に周囲を気にしていた

「フツ刑事さんよ、俺にたった二人とはなめてくれるじゃねえか」

刑事が反応する間もなくジンは一人の刑事の足をかけた
そしてすばやくもう一人の股間を蹴りあげ
手錠をされたままの手で拳銃を抜き取った

周囲の人々は騒然とした
さらにジンの大声で大パニックと化した

午前10時25分、容疑者逃走

「ったくよ、もう大丈夫だっつうのにまだ見学かよ」

「そんな腐るなよ工藤」

俺だって膝の後十字靭帯傷めたから一緒に見学だよ」

サッカー部の中道がはげます

「ええい！まだ星は見つからんのか！？」

松本警視が怒鳴る

既にジンが逃走してから3時間が経った
新一の話によればジンは超のつくほどの危険人物だ
街中で人を殺すことなど造作もない
しかし時間だけが無情に過ぎる

午後2時、容疑者を全国指名手配

「あゝ後1時間かゝ」

「残念でした。今日は数学の補修授業あるから2時間よ」

ジンの逃走を知らない新一にはまだ連絡はない
というより連絡することすら忘れてしまうほど警察は混乱していた

2話 もう二度と…

「極値を出すにはまずこの $f(x)$ を微分してだな」

数学の補修授業が始まってほしい30分はすぎた

新一は肘について眠気と戦っていた

先生はそれに気付いても特に注意はするが軽いものだった
たとえば授業中寝ていても新一は毎回100点をとるのだ

午後4時15分、数学補修授業終了

一方ジンは拳銃で手錠の鎖をきったあと、米花に向かった
工藤新一に復讐するために・・・

あの時、組織が追い詰められたとき
ジンは自決するつもりだった
しかし新一がそれをさせなかった
結局目が覚めたら警察に捕まっていた

「ねえ、今日は特に眠そうだったけど何してたの？」

「別に」

いつもどおりの帰り道
いつもと変わらぬ平和な帰り道

しかし、あの男の姿を見たと同時に平和な時は針を止めた

もう二度と見ることがないと思っていた男によって

「フッ、小僧。久しぶりだな」

心臓に突き刺さった
そして心拍数は跳ね上がる

(なっ・・・なんで…!?)

そこにいたのは紛れも無くジンだった
新一は青ざめて後ろへ後ずさった

「しっ新一？」

普段はどんな殺人が起きても平静を崩さない新一の異常な姿
蘭も目の前の男がよくない人物だとはわかった

「なかなかいいじゃねえか
俺とお前を赤く染める夕日。
俺達のちっばけな未来を表してるみたいでな」

新一は言葉が出ない
頭は混乱状態だった
なぜジンがここにいるのか？
それ以外のことは頭から抜けてしまった

「だが、未来があるのは俺だ
お前は俺が夕日に染めてやるよ
いくつか風穴を開けてな」

逆光で黒くなったジンは笑っていた

3話 夕日

アカイユウヒハトテモキレイダッタ

ソレヲイロドルセンケツ

イツノマニカスベテガテヲクレダッタノカモシレナイ

アナタハボクニオオキナアナヲアケテ

ボクノトナリカラキエテシマッタ

「なぜ…なんで…なんでお前がここにいるんだ!？」

「フン、そんなことはあの世で聞きな」

そついうとジンは左手に奪った拳銃を構えた

「しっ新一！」

「蘭、お前は下がってろ！」

新一は蘭を遠ざけることを最優先に考えていた
しかしこの状況ではそれは難しい

「お前の最後を見届けさせてもらっ、さらばだ」

ドンッ！

拳銃から弾が放たれた
新一は覚悟を決めて目を閉じた

その時、新一の耳に何か声がした

直後に身体が大きくバランスを崩し、地面に倒れ込んだ

顔をあげるとジンも少し驚いた顔をしていた

そして・・・

新一のすぐそばで蘭は右胸を撃たれて倒れていた
銃創からは血があふれ、ブレザーを染めていた

「よっ 容疑者発見！」

銃声でかけつけた刑事が走ってくる

「ふ、どうやらお前の最期は見れないみたいだ
さらばだ、工藤新一」

ジンはその場でこめかみを撃って死んだ

「蘭！おい！蘭！」

撃たれた蘭はぐったりとして微動だにしない
新一は血の気が引いていくのがわかった

刑事はすぐに救急車を呼び5分もしないうちに到着した
しかしその頃には新一が血まみれになるほど蘭は出血していた

新一は放心状態でただ蘭を呼び続けた

しかし、目を閉じた蘭はそれに応えない

「蘭・・・蘭・・・蘭・・・」

車の中で新一は力無く繰り返した

その日の深夜、蘭は出血多量で亡くなった

病院にかけつけた小五郎と英理は取り乱した

小五郎は新一の胸倉につかみ掛かったが
新一のまるで抜け殻のような状態に驚き
顔を殴った

それでも新一は力無く倒れ、そのまましばらく動かなかった

4話 受け入れられない

その晩、おっちゃんは学校、平次、園子などに蘭の訃報を伝えた
誰もが言葉を失った

「毛利くん・・・」

ベットに横たわる娘の前に力無くすわるおっちゃんに目暮警部が声をかける

「どうして・・・どうしてもっとちゃんと容疑者をマークしていなかったんだ！？」
あれだけの犯罪者に付き添い二人なんで明らかに数が少ないってわからなかったのか！？」

これまで警部に対しこんな口調をぶつけたことはないだろう
しかし、警部は黙って受け止めていた

「全て、私の責任だ」

病室に入ってきた松本管理官がおっちゃんに言った

「目暮はこのヤマには関わってない
奴を責めないでくれないか？
責めるならこの私を攻めろ、毛利」

おっちゃんは警部をつかんでいた手を離した

一方の新一は病院のベンチに座っていた
まるで生気を吸い付くされたような顔をしていて
看護師も心配そうにしていた

新一の目には何も写らなかった
ただ暗闇が延々と広がっていく

「新一くん・・・」

英理が声をかけて隣に座る
新一は目を合わせられなかった

「僕が・・・」

会話はそれ以上なかった

昨日まではつきりと感じられたものが

突然去ってしまった

そして取り残された者には

ただ長く辛い現実が訪れる

翌日、英理の連絡を受けた工藤夫妻が緊急帰国した

二人は病院で再会した息子の様子に衝撃を受けた
有希子はこれまで可愛がってきた蘭の死を受け入れられなかった
しかし蘭の体はただ冷たく横になっていた

新一は蘭を見ることができずただ俯いていた

「新一、おまえも見てあげるんだ・・・」

優作の言葉が耳に入ったが新一はそうしなかった

「見たら、蘭が死んじゃう」

「それでも見てあげてほしい
蘭くんもきつと」

優作は途中までいいかけたが新一を見て止めた

「じゃあ有希子と毛利さんのとこにいつてくるから
待っていなさい」

二人は部屋から出ていった

ただ重苦しいだけだった

蘭を見たら蘭に起きた出来事を認めてしまつよう

で新一はこれ以上蘭といられなかった

しかし新一はそこを去ることができなかった

最終話 光

蘭の葬儀は親しい友人たちの間で密やかに行われた
桜の花びらは既に散ってしまった

お経の声と線香のにおいだけが部屋に存在した

みな涙に暮れていた

しかし、新一だけは下を見たまま涙は流さなかった
涙を流す気力すら失っていた

事件以来、新一は精神崩壊したような状態だった
食事は食えずに部屋にこもって一言もしゃべらず一日を過ごした
そして全く寝ていないといっている状態だ
目を閉じると蘭が目の前で赤く染まっていく

「工藤、そんなんじゃない姉ちゃんが浮かばれへんぞ」

平次が声をかけたが新一は反応すらしなかった

お通夜の途中に新一は顔をしたに向けたまま一直線に家に帰った

「待てや工藤！」

平次が追いかけて新一を止める

「お前の気持ちはみんなわかつとる
頼むから姉ちゃんに会ってやってくれ」

「……」

「…このボケ！」

平次は新一に拳を見舞った

新一はようやく平次の目を見た

「最後まで、ちゃんと見送ってやれや！」

平次の顔も辛さでひきつっていた

「服部…蘭は俺のせいで死んだんだ…」

探偵の俺が目の前で」

「姉ちゃんはその工藤を見たないと思うで

いつもの工藤に早よ戻れとは言わんけど、姉ちゃんに最後の挨拶しとかな、一生後悔すんぞ

確かに……確かに姉ちゃんは亡くなってしもうたけど、俺らの中では行き続けるんや」

「……服部、悪いな」

新一は走って戻っていった

平次はひそかに涙を指ですくった…

棺の前には園子がお別れの挨拶をしているところだった

「し…しんいちくん」

「園子か…」

「蘭、ホント綺麗よ」

眠る蘭は神秘的な雰囲気をかもしだしている、そんな気さえした

思い出は色褪せない

例え貴女の肢体が炎によつて葬られたとしても
今、瞳を閉じたとしても貴女は僕の頭の中で笑っていた、泣いてい
た、怒っていた

僕はそんな表情を見れるだけ幸せだ

目の前に横たわる貴女はとても綺麗だね

だけど、触れると僕との温度差は埋められない
雪のような白い肌はただ残酷に白く輝いていた

僕はといえば貴女を置き去りにすることなんて考えられない
今すぐ貴女のもとへと向かう舟に乗って
ただ貴女のいる世界を二人で作るために

蘭が亡くなつて早いもので一ヶ月が経つた

今日もいつものように陽はまたのぼり、一日が始まる

新一は未だに学校を休み続け、大好きだった推理小説も読まなくな
った

この一ヶ月までもに寝ていない

別れの言葉は伝えた

しかし、蘭のいない世界は感情の存在しない空虚な世界だった

（こんな世界に未練はない）

新一はある決心をしていた

その日新一は妙に元気なふりをした
有希子はその姿に肩の荷が下りるような思いだった

新一は夜8時ごろに早くも寝始めた

「
…」

眠る両親に新一は感謝を伝えると同時に謝った
自分がこれからすることへの謝罪だった

ペンを走らせ、机に紙を残した

2階の窓を開けると月明かりがとてもきれいだった

最期にこんな景色を用意してくれる神は偉大だ
そんなことを思いながら新一は両手を広げた

「新一！」

急に名前を呼ばれた

驚いて振り替えるというはずのない人物がそこにはいた

「ら、…蘭」

「何しようとしてるの？」

「お、俺は…」

「新一には残された人生を大事にしてほしいの
私が死んじやったことで、あなたの人生を狂わせたくないの
だから死のうなんて思わないで」

「蘭…」

「本当はもっと前に言いたかったんだけど、ごめんね

新一のこと、好きだよ」

「…ら、ん」

枯れていたはずの涙が頬を伝った

「ほら、涙は暖かいでしょ？」

あなたの心も暖かいの

あたしはもうこんな暖かさを人に分け与えられないけど、新一には
まだできる

あたしはこれからも新一と一緒に生きていくよ
だから、ほら？目をあげて…」

「あつ！」

（ゆ…め？）

新一は勢いよく目を覚ました
時計は6時半をさしていた

「くつ工藤！」

学校に登校すると周りはざわついた
しかし、新一はもう昨日までの新一ではなかった

蘭の死を乗り越えることはできないとしても
新一はようやく前に向かって走り始めた

最終話 光（後書き）

長いこと放置してましたが、なんとなくストーリー思い出せたので

意外と短い最終話ですがご勘弁を…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7979j/>

crush my dream

2010年11月20日10時42分発行